

旅にはハプニングが付き物です。そしてそのハプニングを後で振り返ると、旅の「良き思い出」になることもあるし、そうでない場合もあるでしょう。今回の旅で起こったハプニングは、そのどちらなのか、いまだに私にはわかりません。

◎売る

旅の二日目、「ハロン湾クルーズ」の時の事です。前々回のコラム58:「ベトナムの旅 前篇」の「見る」の項に書いている時のことですね。鍾乳洞観光を終えて、遊覧船に戻り、湾内を巡りつつ乗船した港に向かっていました。その時、またしても雨が風をともなって激しく降ってきたので、私達は上のデッキから下の客室に移動したのです。少し遅い昼食になった洋上での「海鮮料理」を待ちつつ、それぞれのテーブルで雑談に昂じていました。

その時、船窓に**少年の顔**が！

<そこで何してる！>

一瞬、何が起こったのか理解できませんでしたね。私の座っていたテーブルのすぐ横でした。

見ると、少年は**バナナ**の房を、コチラに向かって必死に差し出しています。

その時、私は持っていたデジカメを彼に向け、シャッターを押しました。特に理由はありません。なぜか写真を撮ったのです。一瞬、<マズイことをしたかな！>と思いましたね。

次に、少年のいる窓を開けました。<どうしてそんな所に！>

窓の外を覗くと、もう一人の少年が下にいたのです。小さな船を必死で漕いでいます。

<アブナイことをやっとな！> 風雨で小舟は大きく揺れていました。

その間、窓の少年は右手にバナナ、そして片方の手で、二本の指を立てています。

風と雨が船内に入ってきます。

その時、私は叫んでいました。「ワシが買ってやる！」

少年の二本の指は、2万ドン(100円位)のことだろうと、考えました。

「ワタシは絶対に出さないからね！」

すかさず、カミサンが激しく反対。

<そうか！ワシは金を持っていない！>

私のサイフにはベトナム札「ドン」がなかったのです。

<どうしたらいいのか？>

その時、同じテーブルの同年輩の男性が、強く制止しました。

「本気で買うんでなかったら、相手にしちゃあダメですよ！」

激しい口調です。ふと周りを見ると、みんな私の方を見ているのです。

<なにをバカなことをやってるの！>

そういう非難の籠った、30人の目が私一人に向いていました。



私は窓を閉め、彼から視線をそらしました。少年は、しばらく其処にいたようです。

やがて、船窓から彼の顔は消えていました。

彼の顔はまだ幼かったですね。私には12歳前後にしか見えませんでした。

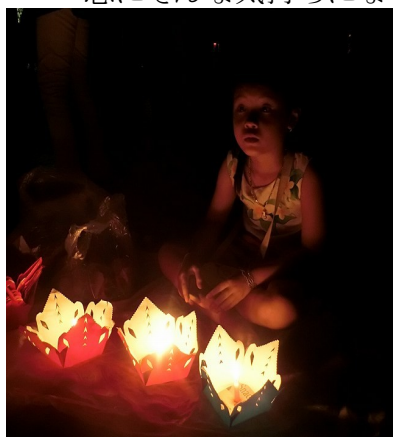
<ベトナムのカネを自分で持つときゃよかったのに>

<海が荒れとるが、アイツらは、無事に帰るじゃろうか>

……そんなことを思っていました。

ただこれだけの「事件」です。私達は、そのあと何事もなかったかのように、船上での食事を楽しみました。しかし、このことを時々思い出すのですよ。
雨が流れる窓の向こうで、懸命に叫んでいた「少年の顔」……本当にアレで良かったんですかね。
＜おまえの考えは甘いんよ。金を出したら、味をしめて又やるだけや＞
＜ツマラン同情をしたら、あんな危ないことをする子供を増やすだけよ＞
そんな声が聞こえてきます。帰ってから読んだのですが、旅行社の「旅行留意事項」にこんな文章を見つけました。
「観光地の売り子は、非常にしつこいので、ハッキリとした態度で NO の意思表示をしてください。曖昧な態度を示すと、周囲から沢山の売り子が近寄ってくる事態となります」

私はどうしてあの時に、少年のバナナを買おうとしたのか？その理由を、今なら説明できます。
あの時、もう一人の少年がいるのを見たからだと思うのです。公園の池にあるような小さな手漕ぎのボート、それを遊覧船から離れないように、彼は懸命に操っていました。船窓の少年の下にいた彼の姿をみたのは、私だけでした。見てはじめて、彼らの置かれた状況が理解できたのです。
その時に、突然こう思いました。
＜よくこんなボートで、ここまで来たな！＞
＜何かコイツらにしてやらんといけん！＞
＜そうだ！ワシが出来るのは、バナナを買うことだけじゃ！＞
……急にそんな気持ちになったんですよ。



この次の日に行った、ホイヤンの「ランタン祭り」では、**幼い少女**たちが路上の片隅に座り、川に流すランタンを売っていました。夜の闇の中、ランタンの明かりに照らされた少女の顔は、本当にまだあどけない表情でしたね。金銭のやりとりまで任せているとは思えませんが、この国の子供たちの多くは、家計を支える労働力の一人として考えられている、と感じました。それはベトナムの人たちの日本人像である「**おじん**」の姿とダブリました。ベトナムの学校の夏休みの期間は、6月から8月までの三か月ですが、多くの子供にとっては、家計を助けるために働く季節なのですね。

ちょっと皆さん、想像して見てくださいよ。
「少年が遊覧船に小舟を乗り付けてモノを売るためには何が必要か」ということです。
まず第一に、船が入ります。彼が手に入れた(もしくは借りた)のは、古い小さな「手漕ぎボート」でした。次に必要なのは「売るもの」ですね。それを何とか安く手に入れなくてはなりません。彼が持っていたのは「小さな実が沢山ついたバナナ」でした。あれは農園でチャンと作った物ではなく、山で採った野生のものではないですかね。元手をかけるようなお金はないはずです。次に必要なのが相棒です。一人でボートは漕げても、客に売る時にはもう一人いないと、あんな小舟は転覆しますからね。彼はそれだけの準備をして、夏休みを待ちます。そして、6月に入って、さっそく実行。海は荒れていたものの、競争相手も少ないだろうと、思い切って船を出したのです。やっとの思いで遊覧船まで辿りついたものの、観光客の反応は……

このような行為は、日本人的に考えると異常です。しかし、ここは路上販売が日常的に行われているベトナムですから、「海上販売」など珍しくありません。旅行案内本にも、「遊覧船に勝手に横付けして、果物を売りはじめる地元の行商人」として、写真入りで載っていました。子供がマネをするには危険すぎる行為ですが、「あの少年」は安全よりも、効率よく稼げる方を選んだのでしょう。体力と、それ以上に**勇氣**のいることですよ。

ベトナムの旅の5日目、6月10日の朝のことです。私達はホイヤンのホテルを出発しようとしていました。そう、あの「最高のおもてなし」のホテルですね。その日は、午前中はダナンの市内観光して、飛行機でホーチミンへ行き、市内観光の後に、夜の12時の飛行機で帰国の途へ、という予定でした。つまり、この後はホテルに泊まることなく、簡単に観光をすまして帰るのみという日程でした。ロビーにおいてみたものの、出発までには、少し時間がありました。カミサンは3-4人で集まって、にぎやかに「井戸端会議」。私は仲間に入れてもらえない感じがすな。「ちょっと、そこらへん、散歩してくるな」 そう言って、私はホテルを出ます。



朝の8時半頃、通る人も車も少ないですね。
あまり元気がない、地方の町の商店街という感じがすかね。
天秤棒をかついだオバチャンが前を走ります。
何を売っているんでしょう。後ろについて行きますかね。
なにかオモロイことがあるかもしれません。

<以下の台詞はすべて、私の想像した会話です>



アレッ！バイクのネエチャンが声を掛けましたよ。
「オバチャン、いつものヤツくれる？」
「アイよ！」 担いでいたカゴを下ろしました。
どうやらお馴染みさんのようすな。
通勤の途中で、いつも買っているんでしょう。
朝飯か？ 昼の食事用か？ よくわかりませんね。

オバチャンはカゴを開けて、中のモノを取り出しています。
白いパリパリの皮です。これは見たことありますな。
私は走って行って急接近。デジカメを撮りつつ話しかけます。
「それウマそうね。何というモンね？」
「これは**パインセオ**いうて、この皮にいろんなモノを挟んで食べるんよ」
これは簡単に言うと、ベトナム風のお好み焼ですね。
「ウチのはいろんなタレが付くんよ」
オバチャンは、「秘伝のタレ」を付けているようでしたな。
「なんや美味そうねえ」



オッ！ここで意外なくお客>が現れましたよ。
何処から来たんですかね。
小さな**ワンちゃん**の登場です。
「なんかウまいモノないかなア～」と皿をクンクン。
「シッ！シッ！おまえにヤルもんはないよ！」

オバチャンに怒られて、ワンちゃんは一度は退散したものの、そう簡単に諦めませんね。
コッソリと後ろの方から再登場。
付かず、離れず、という感じで、
けっこうシブトイですな。



よく見ると、このワンちゃんはまだ子供のようです。
首輪をしているので、そばの洋品店の飼い犬でしょうか。
アタマをナデテやると、スヌーピーのような顔をして
ナツイテきますよ。
ムチャクチャ、カワイイです！



「お好み焼売り」のオバチャンと、
バイクのネエチャンと、子犬のワンちゃん……

6月10日、土曜日の朝8時半の、
ホイヤンの街の風景。

あれから二カ月、今でもあの街角で
こんな生活が、繰り返されているんでしょうかね。

「天秤棒をかついだ売り子」というのは、このコラムに前に載せたことがありました。＜コラム42：戦後歌謡 その2＞において、「東京の花売り娘」という歌を取り上げた時のことです。江戸時代は、「棒振り」(ぼてふり)と呼ばれる天秤棒を担いだ売り子が、ほとんどの生活用品を売り歩いた、という話でした。いっしょに、花売りの浮世絵も載せています。そうなんです。ベトナムはどこか昔の日本に似ているのです。犬が繋がれないで、自由に歩き回っている、という風景も昔の浮世絵にありましたね。車やバイクが走っているのですから、いくらなんでも江戸時代と同じというのは無理があるかもしれません。あえて言えば、50年代から60年代の日本に近いと言えるかもしれません。貧しいけれど、けっこう楽しく暮らしていた頃、たとえば「三丁目の夕日」のような時代に似ている、という感じでしょうか。

夏休みになると、日本の子供たちはどこかに旅行に行くのを楽しみにしています。ベトナムの子供たちは、旅行者からどうやって稼ぐかと考えています。この「格差」は大きいですよ。経済発展の著しいベトナムですが、一日2ドル以下で暮らす「貧民層」が40%という話も聞きました。「貧しい国」とは言えないまでも、まだまだ発展の「のびしろ」が沢山ある国とも言えます。現地ガイド氏が「オモシロイ数字」を教えてくださいました。国民の平均年齢のことです。日本人の平均年齢は40歳ですが、ベトナム人は何歳だと思いますか？なんと**28歳**だというんですよ。交通ルールが無きがごときの、過激な「バイク社会」も、「若者ばかりの社会」ゆえに成り立っているのかもしれませんが。そう言えば、ベトナムでは「お年寄り」を見ませんでしたね。ちなみに、ベトナム人の平均寿命は60歳と聞きました。そうすると、67歳の私なんぞ、とっくにオサラバですな。

今年の1月時点での人口動態調査によると、現在の日本の人口は約1億2500万で、前年比で30万人減となり、8年連続の減少です。急速な人口減少と少子高齢化が進んでいることは明らかです。その記事の中で私が注目したのは、日本に住民登録している外国人が232万人で、全部の都道府県で増加しているということです。現在の日本で、「技能実習生」とか「研修生」といった名称で、沢山の外国人が働いていることは広く知られています。中国人、ブラジル人、そしてベトナム人も多いようですね。彼らは若い人たちばかりですし、日本の中での「労働力」として定着し、業種によっては、彼らナシにはヤッテいけない、といった状況も起きているのです。

ベトナム(越南)という国は、政治的には社会主義共和国で共産党一党支配体制。面積は約33万km²で、日本の9/10。人口は約9250万人で日本の3/4。宗教は仏教徒が多く、ついでカトリック。民族はキン族(越人)が人口の86%。現地ガイド氏によれば、国民の性格は勤勉で、器用、そして目(視力)がイイそうですよ。あれだけの(ベトナム)戦争に耐え、しかも勝利しているのですから、芯の強い国民なのでしょう。日越間の経済交流は盛んで、日本企業は現在約3300社が進出しているそうです。

この「若く元気な国」との交流は、これからの日本にとって非常に大切だと思いますね。もしかしたら、この国との付き合い方が、今後の日本に大きな影響を与えるのではないですか。日本の政策は、「研修生」の受け入れはしても、「**移民**」の受け入れには消極的という状況のようです。しかし、少子高齢化社会の解決策はこれしかないと思うのですよ。日本が「単一民族」ではなく、「多民族」の国になっていくことは、これからの日本が「元気」になるには必要条件ではないか、と個人的には思っています。いろんな問題が、沢山起こってくるということは予想できますがね。

貧しい国から豊かな国へと、人が流れてゆくのは当然の現象でしょう。戦前、沢山の日本人が「出稼ぎ」あるいは「移民」として、アメリカやブラジルに渡りました。他人事の話ではありません。戦前、私の母方の曾祖父は、米国本土のロスアンゼルスで日系移民として働き、現地で事故死しています。このことは、＜コラム48:アメリカの旅 その2＞で写真付きで書いています。父方の祖父もまた、40歳までサンフランシスコで働き、その後帰国して結婚したと聞いています。妻の親戚には多くのハワイ移民の人が居ることは、＜コラム49:アメリカの旅 ハワイ編＞でも書いています。私と妻の「御先祖さん」は、夢を抱いて「豊かな国アメリカ」へ渡って往った人たちなのです。



昨年の6月の中頃でしたか、私のハウスにベトナム人女性がやってきました。知らないオジサンが、突然にハウスの入り口から顔を出して言うんですよ。「すみませんが、ベトナムから働きに来ている子がいるんですが、イチゴを見せてやってもらえますか？」一瞬面食らいましたが、特に拒否する理由もないので、了解しました。「今年はもうイチゴは終わりですけど、それで良ければどうぞ」。

二人の若い女性でしたが、残り物の「小さい粗末なイチゴ」を出すと、「こんな甘いイチゴ、食べたことない！」と無邪気に喜んでくれましたね。

それから半年後の今年1月、あの「世話好きオジサン」が再び来園。今度は、公民館で「ベトナム料理教室」をやるから来てください、というのです。廿日市市内の食品会社で働いているベトナム人女性と、地元の人がいっしょに料理を作って交流を深める会、とのことでした。参加者は20名位。彼女たちと、いっしょにベトナム風のお好み焼き(パインセオ)や春巻き、米麺スープのフォーなどを作って食べましたが、なかなか楽しいひと時でしたね。今回の旅に、ベトナムを選んだというのは、そんな意図しないところでの「伏線」(ふくせん)もあったのです。



わずか6日間のベトナムでしたが、心に残った風景というと……沢山のバイク～路上販売と屋台食堂～バラの花とハスの花～自由に歩く牛とワンちゃん、といった感じですね。それと、あの少年が持っていた、小さい実が一杯付いた「小汚いバナナ」のことを、今でも思い出しますよ。

「あのバナナは、もしかしたらモノスゴう美味しいモノじゃったんかもしれんで」

